

注意欠如多動性障害の特徴を持つ慢性痛患者の調査

田中なつみ^{*,1)}

¹⁾ 聖隷クリストファー大学

【目的】

近年、注意欠如多動性障害 (attention-deficit hyperactivity disorder, 以下, ADHD) と慢性疼痛との関連が指摘されている。ADHD の病態は、前頭前野の機能不全や脳の神経伝達物質であるドパミン・ノルアドレナリンが不足する報酬系ドパミンシステムの機能障害であり、慢性疼痛の病態と神経解剖学的に一致する。つまり、ADHD を有する慢性疼痛患者は 2 つの病態が複雑化し、疼痛が難治化しやすいと推察されるが、ADHD と慢性疼痛に関する報告は散見される程度であり、その特徴については十分な知見が蓄積されていない。そこで、本研究では、ADHD を有する慢性疼痛患者の特徴を調査することを目的とした。

【方法】

対象は 2021 年 8 月～2022 年 3 月に寺田痛みのクリニックに来院された慢性疼痛患者のうち、理学療法が処方された者とし、ADHD を有すると医師が判断した患者に関して、質問紙を用いて ADHD に関するスクリーニング評価を実施した。また、対象者の基本情報 (年齢、性別、BMI) ならびに痛みの評価結果をカルテから収集した。

【結果】

調査期間中、ADHD を有すると医師が判断した患者は 37 例中 10 例であったが、スクリーニング評価の結果、陽性となるものはいなかった。その 10 例の基本情報ならびに痛みの評価結果を表 1 に示す。HADS 下位項目である抑うつは 8.9 ± 4.1 点であり、抑うつ傾向にあることが示唆された。また、自己効力感について、PSEQ の得点は 32.8 点であり、カットオフ値を下回っていた。

【考察】

今回の結果、慢性疼痛患者のうち、27% が ADHD を有しており、抑うつ傾向と自己効力感が低いという特徴をもつことが示唆された。先行研究において、ADHD を有する子どもは抑うつ症状と疼痛を有することが明らかになっている。今回の結果、ADHD のスクリーニング評価が陽性となる者はいなかったが、その特徴としては ADHD を対象とした先行研究の結果と一致しており、今回の結果は ADHD を有する慢性疼痛患者の特徴の一端を示すデータになりえると考えられた。今後も継続してデータを蓄積し、ADHD の特徴を有する慢性疼痛患者の実態を明らかにしていきたい。

表 1 各項目の評価結果

評価項目	結果
年齢	59.1 ± 8.6
性別 (男/女)	1/9
BMI	21.9 ± 4.2
痛みの強さ	3.7 ± 2.3
TS (痛みの感覚)	3.2 ± 2.9
PCS (痛みの破局的思考)	23.3 ± 9.1
反芻	12.7 ± 4.4
無力感	6.5 ± 3.9
拡大視	6.2 ± 1.3
HADS	13.3 ± 7.9
不安	5.6 ± 3.5
抑うつ	8.9 ± 4.1
PSEQ (自己効力感)	32.8 ± 8.3